

---

# オルフェウスの翼

としくん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オルフェウスの翼

### 【Nコード】

N6639F

### 【作者名】

としくん

### 【あらすじ】

銀河大戦終結から十年後、この宇宙で、再び戦いの火蓋が落とされた。銀河連邦特別邀撃隊司令官ネルビー・モルラントは、火星で発掘された古代戦艦『ルシファー』を駆り、再び戦火に身を投じる。銀河連合VS黒銀河：勝利の旗を掴むのは…

## プロローグ

目の前に広がる漆黒の闇。

まるでその場にいるものを全て飲み込むような闇。

それに抵抗するかのように紅く、闇を照らしている太陽。

ネルビー・モルラントはそんな光景を懐かしそうな瞳で眺めていた。

「まもなく、火星『ジェノン基地』に到着いたします。シートベルトを着用して下さい。」

オペレーターの声がデツキに響き渡った。いよいよ到着だ。銀河大戦の終結後、第二級戦犯という大罪で月面裏のナハト刑務所に幽閉されて以来、十年近い時間が流れていた。ひさびさの長旅はこたえたが、なかなか心地よい疲れだ。ただ、これが普通の旅行なら…の話である。

四日前、銀河連邦の官僚が突然面会に現れ、彼にこう告げた。

「もう一度、戦線で指揮を取る気はないか？」

勝手な話である。自分たちの都合が悪くなったせいで有罪にしたくせに、都合が良くなればまた戻すのだ。

…自分たちは軍の駒ではない…

過去を振り返りながらネルビーはつぶやいた。

時に西暦2123年、ネルビー・モルラント少佐は、再び火星の大地を踏んだ。

## Stage 1 翼

十年ぶりに訪れる火星は、確かに変わっていた。銀河連邦の戦艦ドッグや施設、都市ドームまで形成されている。ネルビーは思わずため息を漏らした。自分が指揮をとっていた時代とは、比べものにならないくらい開発されていたからだ。

「驚いたか？君がいた頃に比べたら少しはましになったろ！」

感傷にひたっていたら急に横槍を入られた。入れてきたのは銀河連邦所属太陽系艦隊参謀を務める『クレイトン・ハウラー』だ。ネルビーを刑務所まで迎えに来たのも彼である。火星までの道中、ひたすら軍の文句をぶつぶつとつぶやいていた。自分はこんな事をしている場合ではない、とか、上は何を考えているんだ、とか：ストレスがたまる男だ。

「ひどいもんだぜ、こちとら太陽系艦隊の作戦参謀だったのに！実際仕事つつたらこんな使いつぱしりばかりだ。嫌んなるぜ。」

どうやら今の役職に相当の不満があるみたいだが：彼の話はあまりネルビーの耳には届いていなかった。なぜならば、彼は早く自分の指揮する船を見てみたかった。昔の仕事柄か、うずくのだ。思い余ってクレイトンに噛み付くように言ってしまった。

「で、私が指揮する船はどこにある？」

「おお、そうだった。せっかく艦長服に着替えているんだしな、案内するよ」

いちいちわざとらしいやつだ、本気で船に乗せるつもりなのだろうか。ネルビーは次第に不安になってきたが、とりあえず後を追ってみた。建物に入り長い廊下を進んでいくと、ふいにクレイトンが口を開いた。

「四ヶ月ほど前にな、基地の横に新しい施設を建造しようと地下を掘っていたんだ。」

ネルビーは歩きながらチラッと彼の方を見た。それに気付いている

のか、クレイトンは話を進めていく。

「地下八キロくらいかな。それまで順調だったのに…その深さになったら何か硬いものにあたったんだ。それ以上掘ろうとしたら機械がいかれちまってね、それでおかしいってんでこの基地の機材を使って調査したら、なんと戦艦ドッグがうまっていたんだ。それも時代計測では約一万二千年前になる。どうも、火星の超古代文明の遺跡らしくてな。しかも、驚くことに、まだ動いていたんだ。」

「…火星の超古代文明…まさか」

顔を陰しくしたネルビーの疑問は、クレイトンの答えで明らかになった。

「そうだ、おまえさんのご察しの通り。その文明ってのは、アルクレシオン大文明の事さ」

アルクレシオン…遙か時の彼方、一万二千年以上前にこの太陽系を中心に栄えた超文明である。とてつもない科学力を誇りながら、争い事を嫌い、平和を愛した種族だ。その科学力の中でも優秀だったのは造船技術である。特に彼らの開発したプラズマエンジンは傑作だった。出力、燃焼効率など、どれをとっても他のエンジンの追従を許さない。現に、ネルビーが艦長を務めた『ヘリテイジ』でも採用されていた。まあ。あの船も古代人の遺産だったのだが。

「一応念のためといっちゃなんだが、ドッグ内を調査してみたんだ。すると期待通りかな。やつぱりあったんだよ。」

そこでクレイトンはニヤリと笑った。

「古代戦艦か!？」

「そうだ。彼らの遺産だよ。」

その答えに、ネルビーは陰しい顔になった。当時古代人の残した遺産は『ヘリテイジ』を除いて全て破壊されたしまったと聞いていた。それだけに、『ヘリテイジ』の発見には大きな期待と希望があったのだ。

しかし、そんな船でも黒銀河の…あの船にはには敵わなかった。

「黒銀河の…何だったかな。あの船。え」と…」

「『ユダ』の事か？」

「そうそう！『ユダ』だ！その船のことがな、ドッグのメインコンピューターに入っていたんだ。早速解析したらだな、なんと、あの船は古代人が建造したものらしい。もともと、アルクレシユオンてのは、敵さんの奴隷だったらしいな。造船技術が高いし優れた科学力を持っていた、だから皆殺しにはあわなかったんだろ。しかも仕事はきつちりこなす。」

そこでクレイトンは大きく腕を振った。

「少しは連邦も見習ってほしいぜ。」

少々愚痴が入ったが、クレイトンは続けた。

「で、その職人どもがだな。敵さんが人殺しの道具ばかり作らせるもんだから嫌気がさしちゃまって…ある日、前々から練っていた大脱走計画を実行したんだ。」

「…どうやってそんなことをしたんだ？奴隷なら終始監視されてるはずだ」

ネルビーはいつのまにかクレイトンの話に食いついていた、その事に本人は気づいていなかった、いや、ふりかもしれないが：

「言ったる、彼らは仕事をきつちりこなす職人だった。長い間信用できる物を作り続けると、依頼主つてのは絶対の信頼を抱くようになる。そうなるとしめたもんさ。最初に顔を合わせると後は完成した時しか顔を出さなくなるからな。その間、古代人はやつらの船を作るかたわら自分たちの脱走用の船も建造していたのさ。その一つが『ヘリテイジ』てわけだ。『ヘリテイジ』…いや、彼らの言葉では『プロトリオン』か。これは『光の船』って意味だったらしい。俺たち同様、希望の光だったわけだ」

「なるほどな、おかしな話だ。長い時間がたっているのに今だに希望の光か。彼らは『ヘリテイジ』が再び戦争に使われる事を知っていて残したんだろうか…平和を愛する種族が…」

ネルビーは目の前が暗くなったような錯覚に陥った。古代人の素性も知らず、彼らの遺産を使い、そして負けたのだ。十年前の悪夢

が蘇る。自分をかばい、犠牲となつていった同僚達。彼らの魂が今だに眠るこの宇宙を、再び砲火の色に染めるのだ。

やりきれない気持ちでいっぱいになっている彼に、クレイトンの言葉が容赦なく追い討ちをかけた。

「残念だがな、ネルビー。古代人は知っていたんだよ、だから船を残したんだ。」

「何……!!」

彼はクレイトンを睨み付けた。が、そんな視線をものともせぬようにクレイトンは続けた。

「アルクレシユオンはなかなか巧みだったようだ。これもドッグの記録だがな……残された船は全部で三隻！まずは『ヘリテイジ』だ、そして今回発掘された古代戦艦。それに現在月面裏で発掘されてる超大型船『マルドゥークス』、彼らはこれらの船を『オルフェウス型』と呼んでいたらしい。『ヘリテイジ』はオルフェウス型三番艦、『マルドゥークス』は二番艦。てな感じでな」

「そうか、それじゃ今回発掘された船はどうなんだ？」

クレイトンは再び大げさに両腕を広げた。

「あれはブラックボックスがだいぶ多くてな、まだ解析が終わっていないんだ。現段階で分かっているのは、あの船はオルフェウス型八番艦。名称はまだ与えられていなかったらしい。艦首プレートには古代語で『銀河より迫りし闇を葬りさらん、我が魂は光の槍となりて闇を討つ。我が名は死の翼』て刻印がはいってただけなんだわ。」

「死の翼……か。まるでルシファーだな。十三番目の天使か。」

「……なるほど、ルシファーか。」

何となく言った一言だが、悪くなかった。船の名前にはふさわしくないかもしれないが、いざとなればそう呼ぶのも構わないだろう。クレイトンも納得しているようだ。

だが、この男と気が合うというのは、ネルビーには何となく抵抗があった……

「で、この船は一体どういう代物なんだ？期待を裏切らなかったと

「いう事はそれなりなんだろうな？」

「当たり前だ、こいつのスペックははっきり言って・・・」

クレイトンは両手を上げて、文字通りお手上げの格好をした。

「異常だ。恐らく連合の科学力を総結集しても建造は不可能に近い。」

ネルビーは息をのんだ。お構いなしにクレイトンは続ける。

「まずナノシステムが完全に制御されている。船がダメージを受けたら即座にナノマシンが修復を開始するってやつだな。これには我々もびつくりだ。被弾と同時に修理だからな、笑っちゃうぜ。それと、全方向電磁シールド。船の前にバリヤーを張るんだが、こいつがよくできててな。メインエンジンに負担がかからないように補助エンジンを使ってるんだ。これなら、メインエンジンをフルに使える！それから武装だが、主砲には対戦艦戦電磁ショックカノンが四門。プログレッシブレーザーが両舷八基、アクティブレザーが四基、ミサイル発射管六門・・・」

クレイトンは一つ一つ指を折って数を確認していた：

「まるで要塞だな。」

「当たり前だ、古代人は黒銀河の来襲に備えてこいつを十二世代かけて建造したんだ。そのスペックは『ユダ』をこえてるんだぜ。こいつには銀河の未来が託されてるんだからな。」

「...未来か」

そこで廊下は終わっていた。リノリウムのタイルが終わり、今度はコンクリート調のパネルが広がっている。

ふと見上げるとその先には眩いばかりの紺色の巨体がアンカー（船をドッグに収容するための置き台のようなもの）に乗っていた。『ヘリテイジ』より一回り大きく、なおかつ偉大なものが感じられる。両舷と艦の後ろ上下に備えられた大型のスタビライザー、巨大なエンジンスラスタ、二ヶ所あるのだろうか、ブリッジらしき窓が二つ。前面に張り出した艦首には、赤いシールドで仕切られたようなものがある。



「こいつがおまえさんの指揮する船だ。正式名称、第十二世代超光速星系間航行型超ド級宇宙戦艦…解析できた言葉はさっきの刻印とこれだけ…どうだ？ いかついだろ？」

クレイトンは首を持ち上げながら、得意げに口を開いた。ネルビ―は、その巨体に見とれていて、返事もどこかおぼつかない。

「…ああ、こいつは凄い…責任は重大だな。こいつもプラズマエンジンなんだろう？」

するとクレイトンは人差し指を出して、チツチツと口を鳴らした。

「甘いこと言ってんじゃないぜ、艦長？ こんだけの巨体だ。大型ジェネレーター搭載の大出力エンジンどころか、プラズマエンジンでも焼きついちまう！ こいつにのっかってんのは縮退炉を搭載した超出力機関、その名もイオンエンジンだ。パワーはプラズマエンジンの軽く8倍！ 驚いたか！？」

「プラズマエンジンの8倍！？」

これにはネルビ―も驚かされた。プラズマエンジンは、空間上に漂っている粒子を圧縮シリンダー内に取り込み、高速で回転させ、プラズマイオンと陽電子に分離させ反発させた際に生じる高エネルギーを取り出し動力とする機関である。太陽系艦隊で採用されている核融合機関と違い、高効率でエネルギーが取り出せ、なおかつハイパワーで利便性が高いというのが売りだが…

地球軍の科学力では、理論さえ完成してはいるものの、実現は難しいといわれてきた。そんな大出力を誇るプラズマエンジンだが、今回の発掘ではそれを超えているというのだ。古代人がいかに切羽詰った状態なのか伺える。しかも十二世代かけて建造してきたのだ。彼らのこの船に対する気持ちネルビ―の中に広がっていくのが分かる。長く封印されてきたが、今がその時なのだろう。この船は、彼らにとってもこの銀河の民にとっても、『ノアの箱舟』とも言える存在なのだ。

「ネルビ―！！ネルビ―艦長かえ？」

ふいに後ろから声をかけられた。振り向くと誰もいない。おかしいなと思っていると、

「ここじゃよ、艦長」

聞きなれた声だ、声の方向に目を向けると・・・いや、正確にはさげたのだが、目の前には懐かしい顔が立っていた。

「クオーレ機関長！！」

「はっは！元気じゃったかの？」

クオーレと呼ばれた老人は人懐っこい笑顔を彼に向けていた。もう六十を過ぎていたのではないだろうか、顔には深い皺がほりこまれている。彼の度重なる苦勞がうかがえた。

「久しぶりです、機関長！！お元気そうで！いろいろご苦勞があったんでは・・・？」

「いやいや、あんたに比べたらの。わしのはちくとも苦勞ではなかったよ、それより、また艦長と旅ができると思うたらのお！嬉しくて基地に一番乗りしてもうたわ！！わっはっはっは！！」

機関長の嬉しそうな高笑いがドッグ内に響いた。その大声は軍でも有名だったが今だに健在のようだ。だが、その笑いも、クレイトンの一言で消え去った。

「さて、艦長。そろそろ時間だ。」

「時間？」

「そう。お前さんの要望通り、荒くれ共を集めといたぜ！」  
クレイトンはニヤリと笑った。

「感動のご対面さ。」

## Stage 2 集結

ジュノン基地の遙か上空、火星の衛星軌道上にそれらはたたずんでいた。銀色の装甲に太陽の光が反射している。全部で6隻。間違いないく連合艦隊のものではない。黒銀河の艦隊だ。恐らく、冥王星圏内の前線を突破してきたのだろう。その旗艦らしき船体は、周りの巡洋艦よりも一回り大きく、そして輝いている。

彼らは、ある任務を遂行するために、ここまでやってきたのだ。

「司令、3番艦『メルド・グラ・ヴィラス』より入電。敵、地上基地地下8キロの地点より高エネルギー反応を確認。恐らく例の物である。対応について指示を待つ」と言っております。」

通信手が、艦隊司令らしき人物にそう告げた。

「そうか…やはり彼らはここに残していたか。」

その赤い瞳は火星の二酸化炭素の雲を睨み付けていた。まるで故郷を眺めているような…しかし、鋭い目つきだ。

「全艦隊に伝令。これより全艦第一種攻撃体制。目標は地上基地地下8キロの高エネルギー体。攻撃開始は私の指示を待て。」

「はっ、ただちに発令いたします。」

通信手は手際よく命令を艦隊中に送信した。

銀色の髪をなびかせながら、艦隊司令と呼ばれる男はブリッジの中央に立った。

「地球人よ、悪く思うな。これも宿命なのだ。この銀河に翼は二つもいらぬ。」

その赤い瞳はいつまでも火星を見つめ続けていた。

ジュノン基地の作戦室には、すでに古代戦艦に搭乗するクルー達が集結していた。どれも連合艦隊では選りすぐりの凄腕ばかりである、その中には、つい最近、宇宙軍学校をそれぞれ首席で卒業した者もいる。ルイス・アンダーソンもその一人だ。専攻は索敵。スク

ールでの成績はトップである。彼に並ぶように隣に座っているのは、操船コースをトップでクリアしたローマン・シュバイツだ。二人ともスクール時代からの無二の親友である。

「なあ、ルイス。カフェオレ持ってきたか？」

「ああ、ばっちりだ。一航海どころか、十年はもつぜ。」

ルイスの言うカフェオレとは：ローマンがスクールの売店から拝してきたインスタントのカフェオレである。これがなかなか、インスタントのくせにうまいのである。勉強で疲れきった頭に喝を入れてくれるのだ。二人ともこのカフェオレがなければ生きていけないくらい（大げさだが…）はまっている。とにかく、しばらくは手放せない品物なのだ。

「しかし、ブリーフィングってのはなかなか始まんねえな。ローマン、カフェオレ作りに行こうぜ。」

そう言いながらルイスが立ち上がると何者かがそれを遮った。ついでに、げんこつもくらったのである…ごつん！という響きが部屋全体に響き渡った。皆が音のした方に目をむけている。

「いつ…てええええ！誰だ、こんちくしょう！！」

「ルイス、あなたね…少しはおとなしくしたらどうなの？」

声の主は、ルイス達と同じく軍学校を卒業したばかりの新米、アンナ・フレデリックである。専攻は艦隊指揮、今回の配属での希望部署は副指揮官。俗に言う副艦長だ。この三人、実は同じスクールからの新卒採用なのだが、いかんせん仲が悪い。しかもアンナはこの二人に対しては中途半端な事しかやらないグータラにしか考えていないのだ。各専攻で優秀な成績を収めているほかの者に対しての態度も非常に冷たい。そこからついたあだ名が『クールレディ』、もちろん本人は知らない。容姿端麗、寄り来る男性は全て鉄壁のガードで撃沈。恐ろしい女である。そんな女性と同じ船に乗るのだ。彼らの運も尽きたといえよう。

「あなた達！私達はこの場にいる者と違って、まがりなりにもスクールを首席で卒業してるエリートなのよ！それなりに慎重とプライ

ドを持った行動をしてほしいわね。」

エリート感むき出して語る彼女を、その場にいる者達は快く思わなかった。新卒の新米が何を言うか……と言った具合である。その空気をいち早く悟ったのか、ルイスとローマンは慌てて彼女の口をふさぎにいった。

「いい加減にしろ！先輩達に謝るんだ！おまえ自分の立場わかってんのかよ！」

「うるっさいわね！私は副艦長候補よ！船の重要責任者の一人よ！あんた達なんかよりずっと優秀なんだから！」

言いながらアンナは自分を押さえ込もうとする手を振り解き、いきり立った。そして部屋中を見回しながらこう言い放ったのだ。

「先輩方に忠告しておきますけどね、連合艦隊きつての選りすぐりだか何だか知らないですけど！私が副官を勤める本艦では、私の指示に従っていただきますからね！」

さすがにこの一言は皆の怒りに火を付けた。今までの我慢がぶち破られたのだ。部屋中から彼女に対する罵声が飛び交っている。中には殴りかかるうとする者もいて、それを必死で止めている者もいる。その様子を、アンナが高みの見物とでも言った具合に眺めていると、ルイスとローマンは今一度といわんばかりにアンナに飛び掛った。

「おまえは馬鹿か！何とち狂った事言つてやがる！第一おまえなんかが副長やつたら船が沈んじまうぜ！」

「頼むからもうこれ以上皆様の怒りは買わないでくれ！」

二人の行動と願いは空しく、またもや振りほどかれた。

「うるっさいわね！だから何だつてんのよ！後輩だからって遠慮なんか必要ないじゃない！悔しかったら新米よりいい働きしろつてのよ！」

「ごもつともな意見だ、身にしみるよ」

「へ？」

アンナが後ろを振り向くと、そこには頬のこけた、長髪で背の高

い男が立っていた。アンナを見下ろすようにその目つきは鋭くなっている。服装は、何やら階級の高そうな、しいて言えば艦長服のようだ。

「あんた誰？えっらそんな服着てさ！ここは新型艦のクルーのブリーフィングルームよ、あなたみたいなルンペンさながらのおっさんが来るようなところじゃないわ！」

男はたじろぐ事なく、自分に罵声を浴びせてくるアンナを鋭い目つきで睨み返しながら口を開いた。

「席につきたまえ、ブリーフィングを始める。」

目つきに圧倒されたのか、アンナはたじろぎながら、しかし目線を離す事なくそのまま椅子に座り込んだ。そして、まるで獅子に睨まれたウサギのように静かになった。それを確認すると男はそのまま部屋の奥まで行き、全員の視線を集めやすい公演台に立つと、こう言った。

「みんな時間の迫る中、はるばるご苦労だった。私が今日から君たちの艦長を勤めるネルビー・モルラントだ。」

名前を聞いた途端、皆の顔つきが変わった。同時に動揺なども沸き起こっているようだ。その様子を、やはりな……といった感じでネルビーは眺めている。眺めながら彼は続けた。

「時間がないので手短にします。諸君も知つての通り、黒銀河の進行が再び始まった。十年前の銀河大戦とは違い、向こうは本気で我々の銀河を制圧しようとしている。もしそうなれば、この銀河始まって以来の闇の統制が待っている。それだけはなんとしても食い止めねばならん。そのためには、やつ等の艦隊を一早く叩く必要がある。黒銀河の艦隊を早期発見、殲滅。これが我々に与えられた任務だ。」

皆静まり返っている。まさか、自分たちがこれから乗る船がそんな重要な、そして危険な任務を与えられているとは考えていなかったからだ。しばらくの間沈黙が続き、一人が席を立った。そして何もいわずその場を離れ始めた。一人、また一人。次々と席を離れ、

立ち去る者がいなくなつた頃、部屋には最初いた時の約三分の一程度しか残っていなかった。もちろん新米三人組もいる。

「予想以上の結果だな。」

部屋の奥から声がしたのでそちらを向くと、そこにはクレイトンがたっていた。

「参謀、これだけ残っているが、どうする？」

ネルビーの問いに、クレイトンは笑みを浮かべながら答えた。

「問題はない、すぐに任務にとりかかってくれ。時間がないのでな。それから、君たちとは別にもう数人搭乗する。…まだ到着していないが。遅刻だ。」

「あいつらか…」

ネルビーははにかんだ。それを見て、クレイトンは少々早口に言った。

「とにかく、艦長。急いでくれ。奴らは到着しだいブリッジに押し込む。さっきも言ったが、時間がない。衛星軌道上に黒銀河の艦隊を確認した。早急に発進準備に取り掛かるんだ。」

「了解だ、総員乗艦。発進準備にかかる！」

### Stage 3 発進

古代戦艦の第一艦橋は思っていたより広かった。艦長席を中心に先頭が操舵、向かって左が索敵、右が砲撃、真ん中には天文図らしき球体があり、その左右には通信機と副長席が備わっている。有機的なデザインからは想像もつかないような落ち着く雰囲気、この艦橋は保っていた。

「艦長！衛星軌道上にエネルギー反応を確認しました。数、編成からみて、恐らく黒銀河の艦隊かと思われます。」

リーダーの捉えた反応を、マリアは目をこらして見ていた。

「そうか、何か動きは？」

「ありません。今だ沈黙のままです。」

マリアの返事を受けた後、ネルビーは通話スイッチに向かって口を開いた。

「機関室、補機関のチェックはどうだ？」

ネルビーが艦内通信機を使って質問すると即返答が返ってきた。しかも映像付きでだ。こういった機能は『ヘリテイジ』にも備わっていた。やはり、古代の技術は我々よりも先に進んでいるのだな…ふとネルビーはそう思った。

「まだ済んどらん、なかなか厄介だな。」

「ふむ。仕方ないな、なるべく急いでくれ」

了解と返答があり、通信は切れた。ネルビーはそのまま艦長席に沈み込むように座った。十年振りの艦長席は、座り心地のせいか軽い眠気を誘ってきたが彼はそれを無視した。

すでに艦内では配置が決まっていた。まず操舵はローマンである。次に索敵はルイス、砲撃は、先ほど大遅刻でネルビーに一喝されたニック・アンダーソン、通信は同じく大目玉を喰らったホエン・ロン・パダ（この二人は十年前まで『ヘリテイジ』のクルーだった、ちなみにニックはルイスの兄である）そして副艦長は、希望通りな



のか。先ほどブリーフィングルームで皆に一太刀浴びせたアンナだ。エンジンルームではクオーレが機関長として若者をびしばしこき使っている。

現在、船は基地の大出力ジェネレーターから電力を供給されている。エンジンの始動に大電力が必要だからだ。しかし、エンジンのチェックがなかなかかはかどらず、船は最小限の電力で出港準備を行っている。今敵艦隊の攻撃を受けたら、いくらこの船でも一瞬でただの鉄屑に変わってしまうだろう。

そんな緊迫した空気が流れる中、船のレーダーがエネルギー反応を捉えた。

「直上艦隊より砲撃を確認！！約15秒で地上基地に到達します！」  
ルイスが叫ぶと同時に衛星軌道から無数の閃光が放たれた。黒銀河の艦隊が攻撃を始めたのだ。弾道が地上基地を直指して突き進んでゆく。それはまるで槍のごとく地上に降り注いでいった。

「来ます！！」

「総員シヨック体勢！！」

ドーン！という爆音とともに衝撃がドッグ全体を襲った。壁全体がビリビリと揺れている。慣れない者はシートから弾き飛ばされてしまう程の衝撃だ。ブリッジの電灯が白色から赤色の非常灯に切り替わる。ネルビーはおせじにも広いとは言えない艦長席にしがみつきながらルイスに問いかけた。

「地上基地は！？」

「現在防御シールドを展開、何とか耐えています！」

ネルビーは奥歯を噛み締めた。時間がないのだ。早くこのガラクタを眠りから呼び起こし、上空のハエをたたかねばならない。しかし、黒銀河の艦隊からの攻撃を受け続けている今、何もできない状態に気ばかりが焦る。

「なかなかしぶといな、まだ片付かんのか？」

艦隊司令は焦っていた。彼の予想通り火星に眠っていたものは彼

らが探していたものだっただ。

「バリヤーを展開しているようです、反撃してくる様子はありません」

艦隊司令の問いかけに、索敵士が応えた。艦隊司令は少々不機嫌になった。

「時間がないのだ、仕方ないな。粒子反応爆弾投下！」

「は！」

艦隊旗艦の底が開き、拳銃のバレルのような物が出てきた。そこから何か光のような物がまたたいている。

「司令、投下準備完了しました」

「うむ、投下しろ」

司令の合図とともに、発射口から勢いよく光の玉が飛び出し、地上基地目指して降下していく。

「直上から高エネルギー反応！！恐らく粒子反応型爆雷です！」

ルイスが張り裂けんばかりに叫んだ。

「いかん！総員対シヨック体勢をとれ！！」

ネルビーが言うと同時に、軌道艦隊から放たれた光の玉は超高速で地上に落下しパツと炸裂したかと思うと一気に大地を白い光で飲み込んでいく。上空の雲は蒸発し、爆風は地上を一瞬のうちに灼熱地獄へと変化させた。その威力は地上基地を消滅させると同時に地下ドッグにもダメージを与えいく。ドッグ全体に亀裂が走り、なおもまだ爆音が鳴り響いている。振動に耐えかねたのか、ドッグのトンネルと地上を仕切るゲートが落下を始めた。

「地上ゲート大破！！ドッグ内に落下して来ます！」

ルイスが策部と、ドドド！という音と共に、上から落ちてきた瓦礫が船を埋めて行く！まるで雪崩のごとく、瓦礫は降り止む事を知らない。激しい衝撃が終わった頃には船はすっかり瓦礫に埋もれてしまい、身動きの取れる状態ではなかった。

「くっ…全員無事か？」

「な、なんとか…」

ネルビーが声をかけると四方から声がした。皆無事のようなのだ。

「…予備電源、入ります…」

ブリッジが赤い電灯で照らされる。スイッチを入れたのはルイスだった。それぞれがおぼつかぬ足取りで自分の席に着くと、ネルビーはアンナに問いかけた。

「副長、状況は？」

「は、はい…先ほどの攻撃で基地からの電力供給ケーブルが切断されました。現在、本艦は予備電源で運行されていますが、復旧には十分ほど時間がかかるようです」

基地からの電力が供給されない今、この船はまさに鉄屑同然である。ネルビーはいかんともしがたい状況に歯軋りした。と同時に基地の人間の安否が気にかかる。

「ホエン、基地のクルーはどうなったか、連絡はとれんか？」

「…駄目です。先ほどから信号を出しているんですが…全く反応がありません」

そう言いながらホエンは通信機の周波数を変えながら何度も試みる。

「…応答なし…やはり駄目です！どことも連絡が取れません。妨害電波が出ている訳ではないようなのですが…」

「そうか、ルイス。どうだ？探査は可能か？」

ネルビーはルイスにも索敵を促した。が、

「駄目です！音響探知は可能ですが、スキャナー及びレーダーは非常電源では電力が足りないため探査できません！生命反応の確認も不可能です！！」

なんと言うことだ…ネルビーは肩を落とした。基地のクルーはかなりの人数のはず。たとえシェルターに避難したとしても、全員無事かどうかは定かではない…それほどの爆撃だったのである。最悪の場合は全員消滅したとも考えられるのだ。

「黒銀河め…！」

ネルビーが唸ると同時に、艦長席の通信ディスプレイに光が灯っ

た。

「艦長、さっきの衝撃はなんじゃ!?」

機関長が艦内通信で問いかけてきたのである。突然の爆撃で驚いているのか、やや興奮気味なのがルビーにも分かる。どうやら機関室では新米のクルーが突然の衝撃に動揺しているようで、皆のどよめきがマイクを通して聞こえている。

「何でもない! 敵艦の攻撃を受けたただけだ。」

「そうか、こっちは機関室じゃから外の様子はさっぱり分からんわい! おかげで新米は慌てとるわ。みんな若いのう! わっはっは! それより艦長、待たせてすまんのだ。補機関のチェック完了じゃ! これで何とか動くじやろて! ただし補機関のみの運行じゃと活動限界時間は十五分少々じゃ! 主砲の無駄打ちやバリヤーの使用には十二分に気をつけるんじゃぞ! 始動後は、すぐに主機関のチェックにとりかかる!」

ネルビーの顔が一瞬引き締まったように見えた。

「了解した。」

通信を切るとネルビーは深く息を吸った。再び艦長として宇宙に上がるのだ。

この日をどんなに待ったことか。

気が早くなるのを抑えながら、ネルビーは口を開いた。

「機関始動! 発進準備!」

号令をかけるとみんな手際よく操作を開始した。ブリッジに明かりが戻ると、今度は次々とディスプレイに電源が入っていく。

「機関室! 補機プラズマエンジン始動!」

ネルビーの指示でクオーレはエンジンの始動レバーを引き起こした。その瞬間、プラズマエンジン内に電流が走り稲妻が飛び散るような光が散乱した。

「プラズマエンジン始動、内圧安定! フライホイール接続準備よし!」

「反重力推進機、及び粒子推進機に動力伝達、船体の水平確保だ!

傾斜復元！！船体起こせい！！」

ネルビーの指示でローマンが操舵レバーを操作すると、船体はゆっくりと引き起こされ、傾いていた船が水平に保たれていく。船はドッグの瓦礫の中からゆっくりと浮かび上がり、紺碧に輝く船体を宙に浮かべ始めた。

「双方向回線開きます！全兵装の管制ラインチェック！」

ニックはすばやくスイッチを押していった。ブリッジのメインディスプレイやメインウィンドウに電源が入り、外の様子が鮮明に映し出される。船の外は、まさしく廃墟だった。

「艦長！粒子推進、及びフライホイール接続終了！！発進準備完了しました！」

アンナの声がブリッジに響く。準備は完了した、後はネルビーの指示を待つだけである。ネルビーは深く息を吸うと、静かに口を開いた。

「諸君、本艦はこれよりこの地下ドッグを脱出。第一戦闘速度で成層圏を突破！衛星軌道上の艦隊を殲滅する。その後、冥王星軌道艦隊の援護に回る。恐らく長く、苦しい戦いになるだろう……だが、我々にはこの銀河の運命が託されている。すまんが、みんなの命をくれ」

ネルビーの言葉に全員息を飲んだ。ブリッジのクルーはみなネルビーの方を向いている。

「艦長、そんなこと言っただうすんすか？俺たちは艦長に命預けてんすよ！俺たちの行く末は艦長の行く末！そんな弱気なこと言わないでくださいよ！」

ニックが言った。

「艦長のいない十年は退屈でしたよ、それがまた艦長と一緒に船に乗れる。こんな面白そうなことはないと思ってます。」

とホエン。

「艦長、私たちはスクールを卒業したての新米ですが、艦長の伝説はスクールでも有名でした。皆のあこがれでした。そんな我々の目

指した人が今目の前で、しかも艦長席にいるのです。それだけでも充分ですわ。」

「かー…さっきはあんなに息巻いてたくせによ…」

ローマンの毒舌にアンナはギツと睨み返した…

「みんな…」

ネルビーは心が詰まった。皆の優しさが伝わってくる。

「艦長、俺やルイスも気持ちは一緒ですよ！いつでも来いつてんだ！」

「おい…ローマン、俺を巻き込むな…」

「うるせーな！この感動の場面に一人乗り遅れてんのよ、おまえは！！」

「なんだとー！」

「うるさい！！！」

二人の小競り合いをアンナが止めた。騒がしい三人だが、いるだけでその場が和む。

「行きましょう、艦長！！星の海が俺たちを待ってますぜ！」

ニックの言葉と共に、ネルビーはうなずき艦長帽を引き締めながら言った。

「発進する！！！」

## Stage 4 翼は再び宇宙（ソラ）へ…

衛星軌道上で待機している敵艦隊のレーダーは、火星の地下での出来事を明確に捉えていた。

「司令！！地上基地地下よりエネルギー反応！！上昇している模様です！！」

「何だと！！」

艦隊司令は我が耳を疑った。やつは基地ごと消滅させたはずだ…なのに、何故！？

彼は、渾身の力を込めて叫んだ。

「粒子反応爆弾投下だ！早くしろ！！」

「し、しかし、連続で投下するには、発射バレルが持ちません！！」  
「かまわん！かまわんから早く発射しろ！！」

彼は狂ったような形相で砲撃手を睨みつけた。砲撃手が指示を促すと、船底のバレルから光が放たれ、そのまま降下していった。と同時に、船底のバレルは吹き飛んだ。

「艦長！レーダーに反応！先ほどと同じエネルギー反応です、進路は…」

ルイスの目つきが変わる。

「本艦です！直上から来ます！」

ネルビーはふん！と鼻先を鳴らした。その目は十年前の艦隊指揮の頃と同じ鋭さになっている。

「副長。接触予定時間は？」

「約四十秒後には地上に接触します！」

現在の船の位置は地下約5キロ圏内。このままの速度で上昇すれば本艦の鼻っ面が地上に出た時に接触する…ネルビーの思考は瞬間にこの計算を導きだした。現役から10年遠のいていたとはいえ、この速さには自分でさえもうぬぼれてしまうほどだ。彼はふとそん

な事を考えていた。が、目の前のピンチにはいかんせん対応しなければ、目覚めたばかりのこの船を消滅させてしまつかもしれない。それだけは避けなければ……

「ローマン、巡航速度から最大戦闘速度にあげろ」

この指示にはさすがに皆が驚いた。アンナが思わず叫んだ。

「艦長！今のままで最大速度にすれば、主砲のチャージ中に地上ゲートにぶつかります……」

「かまわん！銀河系最強の船だ、それくらい屁でもない！それに今のままで接触すれば、地上に出さなくてもいい被害を出してしまうことになる。それだけは避けなければならん！」

ネルビーは艦長席から乗り出し、さらに続けた。

「このまま最大速度で地上ゲートを突破！そのまま上昇し、高度5千メートルで横方向に電磁シールドを展開する！そこで受け止めるぞ！」

「艦長……」

アンナの言葉はほぼ絶叫になっていた……しかし元クルーのニックとホエンは、ネルビーの指示に目をキラッと輝かせた。

「さすが艦長……！そうこなくっちゃ！おい、ローマン！聞いてたな！フルスロットルにしろ！今すぐだ！」

「まじかよ、ニック……」

一瞬ローマンの顔が青くなるのが伺えた。が、そんなことはお構いなしにニックは続ける。

「当たり前だ！ここで指示通りにしなかったらお前ら二人に平穩の日々はないぜ！」

ニックは不適な笑みを浮かべながらローマンとルイスを睨んだ。どうやらだいぶ興奮しているようである。ここまで来たら覚悟を決めるしかなかった。スロットルレバーを握るローマンの手に汗が滲む。

「接触まで残り三十秒……！ローマン、俺お前信じる……！」  
ルイスが叫ぶ。



「もうー！！いつけー！！！」

ローマンはスロットルレバーをフルにした。船のノズルから蒼い火柱が勢いよく噴き出してきた！

「現在速度！時速１万八千！地上ゲート接触までおよそ十秒！！」

アンナの報告と同時に、瓦礫の山となっている地上ゲートが正面ディスプレイいっぱいに入ってきた。それはまるで、死者の世界で口を開け亡者を待っている悪魔のようにも思えた。ネルビーの目はその一点だけを睨みつけていた。

「行くぞ！！このまま突っ込めえ！！！」

瓦礫となった地上ゲートを突き破り、ついに古代戦艦がその姿を見せた。周囲に瓦礫を飛び散らかす程の勢いで現れたそれは、見る者がいればさぞ驚かせたであろう。約一万二千年ぶりに、この船はその姿を現したのだ。その姿は、まるで地球の神話に出てくる龍のような姿にも見える。ネルビー達は久々に空の色を眺めたい気分であつただろうが、それは許されなかった。上空から超高速で迫る光の玉を、高度五千メートルで受け止めなければならないのだ。アンナは、時間のカウントを続ける。

「目標接触まで約十五秒！！」

正面スクリーンに白い輝きを広げながら、超粒子の塊はまっすぐに古代戦艦に落下していく。

「現在高度三千八百メートル！接触予定時間まで残り八秒！！」

アンナが叫んだ。と同時にネルビーが指示を出す。

「バリア展開準備！！本艦前方横方向にシールドを展開する！」

アンナがバリアのスイッチに手を近づける。

「スタンバイ完了！残り五秒！！」

ネルビーは目の前を白く染めていく光を睨み続けた。

「残り二秒！！」

「今だ！！バリア展開！最大出力！！！！」

古代戦艦の先端から青白い光の輪が放たれ、船を中心に横いっぱ

いに広がって行く。そして、息つく間もなく直上から迫る超粒子の塊と接触した！激しい衝撃が古代戦艦を襲い、超粒子の塊は砕け散り四方へ飛び散っていった。その様子を軌道艦隊の司令官は、スクリーン越しに睨みつけていた。その顔は、驚きではなく、恐怖に歪んでいる。

「・・・馬鹿な・・・そんな・・・ユダの銀河砲に匹敵する威力を持つのだぞ・・・それを・・・受け止めたばかりか、四方に弾き飛ばすだと・・・」

彼は、汗ばむ手を握り締めた。

「本国の銀河艦隊に回線をつなげ、今すぐだ！！」

この艦隊だけでは奴には勝てん…となれば、本国の艦隊に応援を要請し我々はこのまま後方へ下がりつつ奴を迎撃せねばならん！やっつとこの星域までやってきたのだ、このままむざむざと引き下がるか！彼のプライドは非常に高かった。幼い頃から將校に憧れ、努力し、猛勉強して士官学校へ入学した。成績は常にトップを譲らず、寝る間も惜しみながら、兵法、戦略…あらゆる知識を脳へ叩き込んでいったのだ。その甲斐あって、士官学校を首席で卒業し、宇宙軍へ志願、夢にまで見た將校…そして、今の艦隊指揮官の地位まで登り詰めたのだ。そんな彼の事である。撤退と言う文字は、彼の頭にはひとかけらもなかった。そして、その事が彼を大きく後悔させることになる・・・

軌道艦隊からの直撃をバリエーで回避した古代戦艦は、第一戦闘速度で上昇を続けていた。あれほどの衝撃にも関わらず、船のどこにも損傷はなかった。何事もなかったかのように紺碧の船体は空を突き進んでいく。

「現在高度二万八千メートル、間もなく成層圏を突破します。」

副長の報告に、ネルビーは相槌を打った。第一艦橋の外の景色が青色から漆黒の闇へと変化していく。その闇の中には、幾千もの瞬く星達の姿があった。壮大な景色である。皆がその景色に飲み込ま

れているその時、レーダーの警告音が鳴り響いた！

「敵軌道艦隊補足！！距離一万！迎撃体勢にある模様です！」

アンナが叫ぶ。ネルビーは、メインウィンドウの奥に佇む船に影を睨みつけていた。

「黒銀河め…やる気が…？」

黒銀河の艦隊はすでに攻撃態勢を整えていた。その主砲達は確実に古代戦艦を捉え、いつでも攻撃可能な状態で待機している。あとは指示を待つばかりだ。彼らの目的は、古代戦艦の殲滅…それだけである。

## Stage 5 ギャラクシー、発射！

「全艦隊攻撃準備完了です！」

「うむ、よろしい。」

司令の赤い瞳は、正面スクリーンに映った古代の翼を捉えていた。本国の艦隊がここに到着するまでは我々が食い止めなければ…

「全艦隊へ伝達。全砲塔一斉正射！目標、前方古代戦艦！！」

彼は右腕を高く上げた。

「つてえー！！」

右腕が勢い良く振り下ろされると、敵艦隊の全主砲が咆哮を上げた。砲身から飛び出す一筋の光が束となって、紺碧に輝く、目覚めただばかりの古代戦艦に向かって突き進んでいく。

「これで消し飛ばえ！！」

「艦長！敵全艦隊の攻撃を確認！主砲からの一斉正射です！」

ルイスが叫んだ。

「くつ、こちらに攻撃をさせないつもりか…」

「あと十秒で着弾です！」

「副長！電磁シールドスタンバイ！最大出力だ！」

「了解！」

アンナは、バリアーのスイッチに手を伸ばした。

「残り二秒！！」

「今だ！」

ルイスとネルビーが重なるように叫ぶと、アンナは瞬時にスイッチを押した。船を包むようにバリアーが展開され、黒銀河からの攻撃を食い止めた。

「ニック！一番砲塔に動力伝達！主砲発射用意！」

「了解！」

勢い良く応えると、ニックは主砲の発射に取り掛かる。だが…

「んん？」

砲撃用操作パネルが全て赤く点滅している。操作パネルの下には『POWER EMPTY』と表示されている。ニツクは焦った。

「ダメです！エネルギー不足で主砲の使用はできません！」

「何！？」

ニツクに並んでアンナも叫んだ。

「艦長！補機関の出力低下！バリアーの過使用で予定より多くエネルギーを消費しています！このままでは…」

アンナは立ち上がり、声を震わせながら言った。

「電磁シールド消失とともに…本艦は機関停止します…」

「…！！」

ネルビーは一度握った拳をもう一度強く握った。その手は震えている。

何たることだ…黒銀河を前にして一太刀も浴びせられんとは…

敵の攻撃は以前続いている。アンナの活動限界時間が残り三十秒も無いという言葉がブリッジに響き渡る。

ネルビーは、メインモニターに移っている黒銀河の艦隊を睨んでいる。

そして、古代戦艦のバリアーは消えた…

「司令！敵戦艦の防御シールド、消失しました。」

その報告に、彼はニヤリと笑った。

「ほう…どうやら目覚めたばかりで主機関がまだ機能していないらしいな…よし、全艦隊の攻撃を奴に集中させる！」

そして、スクリーンに映し出されている古代戦艦を指差しながら言い放った。

「主機関が動かぬ奴など、恐るるにたらん！宇宙のチリにしてくれろ…！」

再び敵艦隊の攻撃が始まった。だが、先ほどとは打って変わって激しい攻撃になっている。並の艦隊なら、一気に殲滅されてしまう

ほどの攻撃だ。攻撃は全て古代戦艦に直撃し、爆発音に混じって煙が噴き出している。

「いいぞ！攻撃の手を緩めるな！」

司令は歓喜していた。攻撃はドンドン打ち込まれ、そのたびに爆発音が響いていた。爆煙が古代戦艦を包み込んで行く。

「目標！完全に沈黙！」

「よし。撃ち方やめ！」

彼が手を上げて指示を出すと、艦隊は攻撃を止めた。

彼は満足していた。これで本国に外旋できる。これで出世の道が開ける。自分だけではない。彼の家族も国から称えられ、歴史のページを飾るだろう。

自分の艦隊は、ユダを越えたのだ…！

「くつくく…はは…ふははははは…！」

彼は言い知れぬ喜びに満ち溢れた。ユダを持ってしても殲滅は難しいと言われてきた「死の翼」を、ユダより性能の劣るこの船で、艦隊で葬り去ることができたのだ。たとえ彼でなくともそうなるだろう。しかし、彼の喜びも、次の瞬間消えてしまうことになる。船のレーダーがエネルギー反応を捉えたのだ。

それも…

「目標内部に高エネルギー反応！！先ほどとは比べ物になりません！とんでもない数値です！」

「何だと…！」

司令が索敵士を跳ね飛ばし、ディスプレイを睨むと、彼の言う通りとんでもない数値のエネルギーが観測されている。

「こ…これは…」

司令は、震えながら後ずさりした。

「…まさか…縮退炉が…イオンリアクターが起動したのか…！？」

「目標、映像で捉えました！」

そう言つて、メインディスプレイに映し出されたのは、紺碧に輝く船体であった。それも…無傷である。

「ば…馬鹿な…艦隊の砲撃を全て浴びせたのに…む…無傷だと…！」  
彼は拳を固く握り締めた。その手はひどく震えている。

「ぜ…全艦隊に伝令！今一度、『死の翼』に一斉攻撃をかける…！」

古代戦艦のブリッジでは、皆が安堵のため息を漏らしていた。

「ふい…危なかった…」

ルイスが至極疲れきった顔でつぶやいた。

「全く…ひやひやもんだったぜ…」

ニックがそれにならう。

「どんぴしゃのタイミングで主機関が動くんだもんなあ。」

ローマンが続いた。

「皆、気を緩めるな！まだ終わったわけではないぞ…！」

ネルビーの一言で、ブリッジには再び緊張が走る。皆の顔がキリッとして引き締まった。

「副長、現在の状況は…？」

「はい。現在、本艦は主機関の起動により、ナノシステムの制御、及び電磁シールドの半永久使用による防衛システムのフルコンプリート、全兵装の使用が可能になっています。」

アンナは、自分の席にあるディスプレイを眺めながら返事をした。  
「ということは…ギャラクシーの使用も可能…ということだな？」

ネルビーの問いかけに、アンナははつきりと答えた。

「はい。ただし、ギャラクシー使用後は砲身及び機関冷却の為、約二十秒ほど全機関が停止しますが…」

「そうか…」

そう言うのと、ネルビーは黙ってしまった。だが、それも一瞬のことだった。ネルビーは顔を上げた。

「よし、やるぞ！副長！第一砲塔に動力伝達！目標、前方敵戦艦！」

それを聞いて、アンナも声を張り上げた。

「は！全艦攻撃態勢！対戦艦戦用意！第一砲塔に動力伝達、第一砲

塔安全装置解除！」

「まっかせんしゃい！」

アンナの指示に、ニックは待つてましたと言わんばかりに操作パネルを操作した。古代戦艦の第一砲塔が旋回し、安全装置が解除された。ニックは照準ディスプレイを覗き込んで目標を確認する。照準は敵艦隊の一番先頭に位置する巡洋艦に定めてあった。

「目標ロック！エネルギー充填百パーセント！進路オールグリーン！副長、指示くれや！いつでもぶっぱなせるぜ！」

アンナはネルビーを見た。ネルビーは静かにうなずく。そして、叫んだ。

「ニック！オープン・ファイア！」

「イエッサー！」

そう答えると、ニックは主砲の発射ボタンを押した。古代戦艦の第一砲塔から青白く光るエネルギーが勢いよく放出される。そして、それは瞬く間に敵艦隊まで伸びていき、照準を定めていた巡洋艦を貫いた。一瞬の間を置いて、巡洋艦は爆発し目下の惑星に落ちていく。一撃轟沈である。艦隊旗艦のブリッジでそれを見ていた彼は、恐ろしさのあまり体中が震えていた。

「……あ……」

副官が近寄り、くぐもった声で指示を聞く。

「司令……ご指示を……」

「攻撃だ……」

「……は？」

司令はなにかば絶叫で指示を出していた。

「攻撃だ！今すぐ……あの船をこの銀河から消滅させるのだ……」

司令の絶叫と共に、敵艦隊は再び古代戦艦に照準を合わせた。その様子を、すでに古代戦艦のレーダーは捉えていた。

「艦長！敵艦隊が再び本艦に対して攻撃態勢をとっているようです！」

ルイスが報告した。それを聞いたアンナは怪訝な顔でネルビーを



見た。

「どうされますか？主機関が正常に稼動している今なら…」

「…君ならギヤラクシーを使うかね？」

ネルビーの咄嗟の問いに、アンナは少々戸惑った。彼女は自分の考えを読まれたように感じたのだ。

「確かに、今なら使うことは可能だな…時間もあまりない。出来れば、この局面は早々に仕切ってしまいたいところだ。」

そこまで言うと、ネルビーはニヒルに笑った。

「そう…考えたんだろう？副長？」

「…ずばり…ですわ…」

アンナの答えにネルビーはふっと笑うと、「私もそう考えていたところだ」と言い、ニツクに指示をした。

「ニツク、ギヤラクシー発射だ。」

「えっ!？」

そう言われ、ニツクは思わず振り返った。

「聞こえなかったのか？ギヤラクシー発射だ!」

「りょ…了解!」

そう言われ、ニツクはギヤラクシーの準備に取り掛かった。ディスプレイの操作でギヤラクシーを選択すると、操作パネルの横部分が赤く点滅し始める。彼はためらいもなく、そのボタンを押した。すると、艦首にある紅いシールド部分が下に折れ、艦首部分が左右に大きくせり出すように開かれた。その中から、巨大な砲身が姿を現す。

「あ…あれは…」

それを旗艦のメインスクリーンで見ていた彼は絶句した。

「ぎ…銀河砲…」

その顔はみるみる青くなっていく。彼は少しずつ後ずさりを始めた。すでに彼のプライドはズタズタに引き裂かれ、その心には後悔の念がひしめき合っていた。

「て…撤退だ…」

彼はつぶやいた。だが、それはつぶやき以上には大きくならず、皆凍りついたかのようにその場から動けなくなってしまうていた。彼の見開かれた瞳には、古代戦艦の艦首から突如姿を現した砲身が焼きついている。それは、銀河砲と呼ばれる、黒銀河最強の船「ユダ」に備えられている最強の兵器と、姿が酷似していた。そして、その威力も…

「ギャラクシー、スタンバイ！エネルギー充填開始！」

ニックはひたすら操作ディスプレイとにらめっこしている。

「現在、充填率二十パーセント…」

ニックの声がブリッジに響く。皆にある種の緊張が走る。それは、今まで見たこともない何かをこの目で見る興奮と、何か見てはいけないようなものを見る後ろめたさが入り混じったような緊張感だ。その空気に飲み込まれそうになりながら、ニックはエネルギーの力ウントを続けている。

「充填率七十パーセント！」

アンナの席にあるディスプレイには、船の様々な情報の他、エンジンの出力ゲージ等も備わっている。そこには、イオンエンジンの出力バーも記されており、ギャラクシーのエネルギーが七十パーセントを越えた瞬間、出力の半分以上が砲身に持っていかれたことも分かった。アンナは叫んだ。

「メイン・エンジン出力低下！ギャラクシー内圧力上昇中…」

「充填率九十パーセント！」

「副長、カウント開始！」

ネルビーが言くと、アンナは発射のカウントを始めた。

「十、九、八…」

アンナの声が静かなブリッジに響き渡る。ブリッジが静か過ぎて、アンナの声が段々無機質になっていくようだ。

「三…二…一…ゼロ！」

ネルビーの目が鋭く光った！

「ニック！ギヤラクシー、発射あ！！」

ニックは、言われるがまま、ギヤラクシーの発射ボタンを押した！古代戦艦の艦首から現れた砲身からは、一瞬、粒子のような粒が集められ、そのままピシャ！という激しい音と共に、高出力のエネルギーが吐き出された。それは、敵の艦隊へ近づくにつれ、増幅し、巨大な光の波となって敵の艦隊を包み込み、そして焼き尽くした。

そのさまは、十年前の銀河大戦で、ユダが銀河連邦の艦隊へ放った攻撃と酷似していた。

ネルビーの耳には、あの時「ヘリテイジ」をかばって直撃を浴びた仲間の断末魔が響いた。それは、ニックとホエンも同じだったかもしれない。だが、これで彼らは「ユダ」と同じ力を持ったのだ。同じ、アルクレシュオンの力を…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6639f/>

---

オルフェウスの翼

2010年10月9日21時42分発行